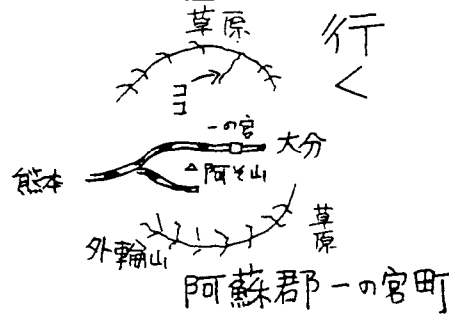


報知 龍屋 新聞

特集

三閑坂に行く

〔阿蘇登り外輪山は有名な熊本から東へ六〇キロ、標高五百メートルのところに阿蘇カルデラがある。全長百知の外輪山に囲まれた平原に阿蘇郡の町村があるが、その北東に位置するのが一の宮町である。外輪山の内壁を「崖」と言うが、その崖にはいくつもの坂がある。一葉落に一つ以上あるのだ。標高差三百メートルと通うこの坂はどれも険しい。一の宮町史の「草原と人々の営み」の著者の大滝典雄さん



に書いたのだが、もっとも厳しい「えびり坂」は百米進むのに高度は二一メートル登らなければならぬといふことだ。文字通り、いやいや通うほどの道である。町内には三十五ある坂のひとつの三閑坂にナオはさしかかったのである。荷車は国道に置いてて空身で登ったことは、カンバンよ!

16号の発行所
阿蘇郡一の宮町
官地若井康純
本社のあるに
299-28
甲 鶴川市代 623
0470-92-9912
報知龍屋新聞
社です。

急告
ただいまタビ
先への連絡が
できます。ラブレ
ター、80円切手
の差入れを必ず
付けておきます。
付連絡先
〒900
郡新市松山
2-23-17
サンイツ306
井武実オ

阿蘇のカルデラから北へ九住山へ抜ける。別府阿蘇道路と目して一の宮町官地を出発する。阿蘇神社の神前街である。一直線に伸びた道が外輪山に突き当たった所が古城の三閑である。三閑ほどの家々が山崖のふもとに横長に構えているのが、手にとるように見える。サエズギるものが何もないのだ。道の両側は霜枯れ色の田が続く。行けども行けどもふもとに近づかない。「近くて遠くは田舎の道、遠くて近くは男女の仲」ときたもんだ。小一時で外輪山のふもとに着く。一軒の雑貨屋があったので寄ることにした。いま九時半だが、まだ何も

口にしないのだ。パンを一つ百三十円で買う。着色料、防腐剤、アミノ酸……まるで毒入りまんじゅうを手にする思いだ。店の奥で七十格好の男と四十代とおぼしき男が茶のみ話しさしながら石油ストーブを囲んで座っていた。オオは、「この近くに三閑坂は有りませうか?」と向うた。「この道をしばらく登って行けば、赤い鳥居があるからすぐわかる。バツテン、まあ、近ごろは人が通すことなかもんない。道が有ったか無かったか……」と教えてくれた。ナオは礼を言っって再び道を登って行った。

(八面からめつづき)
↓同じ宣伝文句はいたるところにある。新幹線ののぞみは現在、東京-博多五時間四分で結んでいるが、近いうちに四時間台で走り抜けるべく努力しているが、客は嫌だ。逆におくると駅員に詰め寄る。ハカていぬいなおいさつに腹は立たなかったが、肩をたき合って共に祝福し合っていた。秋の駅舎には誰ひとりいなかった。奥とくに膝を擦り合わせて座っていたミニスカートの女の子、あの子が座っていたイスにナオも座ってみる。彼女が残っていたのであろう肌のぬくもりはすでに消えてなかった。が、彼女と同じイスに座っているのだと思うと、少し腹のあたりがあたたかくなってきた。

△ △ △

巨石に使う石は大きいものでなければならぬ。昔々のように、大きな石を山中に深く埋め込むのだ。そして端端の巨石にはごまれるようにして中に石を敷いていく。どうすることでも、上からの加重にも耐えられる丈夫な道を造ることが出来る。

四十余年は補修しては来なかった。雨が降るたびに両端は深くえぐりとり、巨石が露出してしまったものと思える。私の目にした一列は三十センチ以上も地表より浮いていた。それでも少しの狂いも生じていない。いかに大石を埋めたことか。その大石はけっして手近かにあったものではな

い。急斜面の山肌を顔のどかす岩を見つづ、それを玄能(鉄シマの小型判)で小判りにして現場に運んだはずだ。その割った石の目(面)と

見定めて、より平坦になるように敷きならぶる。今、金買が石工の心得を必須としたといえ、並の労力ではない。急坂を石をころばすのだから、時には思ひぬ事起き出した水もいれない。多くの石工を輩出した天草からも応援を求めたこともあった。それは大正末から昭和の初めにかけてであった。

この石を敷くまでは、干し草を背に積んだ牛が、泥田と化した道に足を濡れて腹まで地表についたと言ふ。田に何十頭の牛が二り下りし、しかも昼なお暗く、水はけも悪いところは、雨ともなれば、えぐれた道はりとなり、ますます泥田化していく。

坂庄屋

私が胸騒がしたのは、昔も石置の美しさに、でもなく、未だ山明かぬ石工の腕に

対してでない。この坂が、上りたため、の坂ではなく、下りたため、の坂だったからである。荷をかつぎあげ、道ではなく、かつぎ脚すためのそれである。役中の両肩に外輪山の草原で刈り干した草を積み、それをムラまでおろすのだ。広大な草原の干し草は阿蘇のカルデアの住人には欠かせないものである。牛の飼料、き草、堆肥、茅屋根材として利用された。

年に二三百回も草原に通って干し草を運ぶおろした人もいた。遠く外輪山の北の小国村の人たちの中には、この干し草を手するのために、一家を挙げて草原で、草泊りをしていた。竹で四角組を作り、それに茅を葺いた簡便な小屋に寝泊りして草刈りしたのである。同じ草で見ると、草泊りの風景は北米インディアの野営地と変わるところが

ない。昭和三十年代までの光景である。坂道を確保している外輪山の内側の「庄屋」にあるムラは、日帰り作業が可能だった。草泊りを必要とせなかった。

坂道の補修管理には、坂庄屋の制度が設けられていた。三間坂よりも東寄りには阿蘇品坂と言ふのがあがるが、そこには任期二年、輪番の坂庄屋を選出していた。三十戸のムラを三分に二名づつ、世話人がいて、庄屋はそのうちの一名となる。庄屋の最大の仕事は、坂草ぎきの指揮であった。

この配が急なために、荷を積んだ牛が足をふんばってブレイクかける。そのために、牛が痛み、牛が悲痛はなまき声を上げるのだった。その痛を減らすために、草を石置の上に敷きこめる作業である。坂庄屋草ぎき

の要領で、石の上に重なるから置いていく。石と石のすき間をなくすようにも心がけた。

「下の人がぬ？」

これより先、十二月の末に静岡県下の大井川沿いの村道を下っている時のことであった。中川根町の何と言ったか、小さな集落の坂を荷車を曳いて下っていた。七十過ぎと思える老女が坂をゆるり上ってきた。ナオはそれと遠くまでまに声を掛けた。「たいへんだねえ、坂が急で、」

老女は曲がりかけた腰を伸ばして立ち止まった。両手には、ビニル袋を提げている。下の方に店屋まであるのだろうか。ナオの姿勢好を見ながら笑顔を作った。「なに、荷電車にも乗らず、そやうして車曳いて歩いたほうが楽いだわ。ナオはそれには答えず、先に質問してみた。

「坂で足腰鍛えられて心臓も強くなっていったが、」

と老女の口真似をした。

「ためたよ。……どうから来ただいね。」

と聞かされた。

「友だちがこの上の桑野山にあるで、そこを訪ねての帰りだ。」

「ほお……下の人があつ。」

と言おう。ナオは下の人間なのだ。

平地の人間は生活の場を定ずるために川をよこし、道と道と

て内陸深くに入っていく。

この人にならばなるほど、谷はせまり、耕地も限られてい

く。日光の恵みも少ない。極端な場所では一日に三時間しか

陽が当たらない。下の人には比

収入も少ない。生活はより厳しくなる。それでも、下の人がな

つくと上の人に言われるとき、

位取りは明らかに「真けている。

行止まりの袋衣ラに住む

人間が抱えている不安感が物と人間との往来の中にさらされて生きていく下の人にはそなわってはいなかった。

下る石坂

石置の右手の土手が遠くくと、西の耳石がはまりと

坂を現わした。土砂が崩れ落ちていらいと、うことは水は

けがうまうまに流れている。箇所な

のかもしれない。耳石の両端は

地表のレベルと同じで、土砂が

えぐりさらされた跡がない。幅

五尺(一メートル)ほどの石置の

坂道に立ってナオは、いま上

ってきたカーブを見下してみ

た。耳脇をえぐられて

あたりは、この配も急であら

石が敷かれる以前は、ここは難

所だったことだろう。重荷を

買ながら、ブレイキをかけて下っていく牛の力は割ればれあが

ていたはずだ。それでも草刈

びが中止されることはなかった。

荷と運ぶ下すことと生活が取り

立てたからである。そして、

その歴史は、けつて古くはない

と言ふことを見逃してはなら

ない。古代人は外輪山の上の草

原に暮らしていたのであり、カル

デラは、その治原であった。人間

の住める地ではなかった。ナロ

洞は群は、けつて低地にはない

人は坂を下ることをたえず

試みていたのである。崖の

が普及した昭和三十年代にその

役を終えた坂道にたすみ

ナオは深呼吸をひとしつた。

それは、ため息ともあひが

水とまつかないものであった。

ただ、そこに立っていること

だけでナオは充足していた

のである。芥川大連、阿蘇の如保天

の著書。阿蘇の如保天

阿蘇外輪山

阿蘇社と西殿

阿蘇外輪山

阿蘇外輪山

阿蘇外輪山

帰路は丁取を利用した。大分駅で乗った肥(阿蘇)本線のダイヤルは、曲後後竹田が終点であった。そこから熊本行きに乗り換える。一輛編成のダイヤルが降りた木々の反行側に待っている。

小雷がさうつき始めた。寒風。それ

でもナオは冷えたダイヤルを一本ホ

ームの売店で手に入れて車に入

っていく。別府の林さんの奥さんが

別れぎめに差し入れてくれた、

手製のいり雑魚と天然酵母

阿蘇外輪山

阿蘇外輪山

阿蘇外輪山

阿蘇外輪山

阿蘇外輪山

阿蘇外輪山

阿蘇外輪山

ひとつ前の鞍馬で妹と別れてきたばかりだとのことだ。大分二人で行くの帰りにあった。竹田から二人は乗せようか馬車を広げていたのをナオはおぼえている。妹がめが家に向うてくれたはすだから息子が波野馬まで車で向う来てくれたのははすだとも言っていた。

ナオは老女のそばを離れて運転席に近よる。その席は前向に向う左側にあり、中央部はガラスを越した客室から外が見えるようになっていた。

ナオはレールの様子を見たと思つて窓に寄つてみるが、だめだつた。前照灯が照らし出す先はレールの上ではなく、数メートル先の両側の樹木ばかりであった。

運転手は脇窓をあけ、半身を外に乗り出して車体の下をのぞきこんでいる。右手は運転バーを握つたままである。

△△△

「レールカーはとうとう止まらなかつた。運転手は席を離れて客室のほうに顔を突き出した。顔に汗がにじんでいた。「お客さんはどちらまで行かれますか？」

「波野までだけでいい。」
「どちらのお客さんは？」
「目的地までです。」
その時運転手は停車の理由を向き言ひなかつた。代りに「あつてますが、しばらく待つて下さい。」

と、ずいぶんとてぬいなも言ひだした。老女はたずねることもなしに「帰りが何時になつてかねえ」とまた同じ心配をくり返す。

ナオは何時までも帰らなければならぬ、と言ふ心配はない。言はぬる先は自身の友人だ。しかも扉の合鍵を私は渡されて、運転手は席の横の乗務員用専用ドアを開いて線路

にありつた。車体の点検とレールの様子を見に行つたようだ。運転手は小太りのした長身の、人なつこい顔の男だ。だが、終始無言で忙しく動いていた。

しばらくしてドアが「パタン」とゆまる音がし、そのあとすぐに車は動きだした。レールにスピードを上げて人の走るほどの早さになつた。が、それもつかの間、またスピードダウンし、いともめつさり止まつてしまつた。老女は不安顔をかくすずに席を立つてナオのいる前の方に寄つてきた。しきりと外の様子ぞろぞろりながら、

「もう少しのほれば古閑の踏切りがあるはずだ。……そこまで行けば車も来れるしねえ。わたしの実家はその先の滝水で、お女の女学校まで、毎日六キロを走つたから、この辺は良く知つてるんだけど」

と、初めは笑顔をおみせた。早寄りが娘時代のことを口にして少し照れ臭かつたようだ。運転手はあつかうらず無言で奮闘している。室内の隅に積まれている袋のひとつを右手でゆじづかみして、それを肩にかかえあげて線路に降りて行こうとする。レールの上にスリッパ防止用の砂を敷くのだから。ナオが

「手伝えることがあれば言つてくだいな、手伝いますから」と申し出たが、「いえ、いいです」とだけ返つてきた。それはナオも予測していた答であつた。客が車外に出て、何か事故でも起されれば、彼は責任を向われることになる。ナオは自身に

「余計なことはするまい」と言ひ聞かされた。前照灯のうす明りの中で、レールの上に砂を敷きながら前向の間に消えていく姿が目に入った。ナオは一瞬、越えてはならぬハードルを感

じたが、体のほうには、計器類に囲まれた運転席をすり抜けて、闇の中でステップを探しながら、地上に降りてしまつたのだ。そのとき、すでにハードルは意識から抜けていた。そんなことよりも、地に足を着けた新鮮さ、犯してはならぬ、も犯してしまつた興奮と言つたものが心地よかつた。ナオは運転手に歩み寄り、

「砂かして下さい。」と申し出る。砂をナオに代ひの中から空缶に分け与えながら、「すみません」

とだけ言う。その時の頬のゆるみは「助かつた」という表情であつた。氷点下の作業なのに、運転手は額に汗をたため、また、息をハハハいせつていた。少々肥満ぎみの五十男にとつて、走るようにして、中腰の姿勢を保ちながら砂を散らす作業は体にこたへるとみえる。砂と思つたものは、実は大豆粒大の上のかたまりであつた。

大の上のかたまりであつた。

指先で滑走の勢に任せては、

やわらかい。スリッパ止めに

「ナオは無言で土をヒールの上

敷いていく。ヒールの山が丸味を

帯びてくるためゆりか、あるは

凍ってゐるためゆりか、敷い

た土の三分の一はヒールから滑

り落ちてしまふ。それでも小こ

なシューズの空まは、ハイでマ

ートト今はあった、ナオは二杯目

を貫くに運転手の元に近

づいた折、

「滑りますよ、」

と、自明の事とをたずねた。

「ま、止めときまはしやう」

だったのか、あるには、

「はい、ありがたうございませ

だったのか、ナオの耳には確か

な響きか、伝わらなかつた。

ナオが先になつて車内に戻

た。

老女も気がなつたとみえて

立ったまま、外の様子を見

うかがつてゐたようだ。

運転手は、先ほどと同じ

ように、半身になつてヒールを

点検しながら、ヒールを握る。

ゆっくり発車させた。車輪が

を行く。エンジン音も低く、空

回りしてゐるふうでもない。

どれくらい進んだのだらうか。

またしても止まつてしまつた。

運転手はブレーキをかけたの

だが、その直後に、車輛が

あとすべりするのが、はつきり

ゆかつた。

運転手はすぐに土を敷き

に行き、と、行。カセットをま

ぐつて、携帯電話を取り出した。

左手ひとつで手帳をとり、右手に

手のひらに乗る電話器を身

せてゐる。目ごう開かない手帳と

途中でスリップのため停止

してゐます。どうぞ、

「ええ、救済解りました。ど

辺で、すまう、どうぞ、」

運転手はすぐに返答をせ

なかつた。交信内容も左向

ていた老女が近寄つてきた。

「救からどのくらい来たらうか、

と運転手にたずねる。彼は

交信を中断して

「まだ、一キロがそこ、というど

ようねえ、」

と、ナオに同意を求めると、

顔を向けた。

はその提案には反応せず、

「いま少し前に陸橋をくぐつて

きたと思つたけれど……」

老女は何も答へなかつた。この

を熟知してゐる彼女の、ことだから

おそろしく橋はないのだらう。運転

手は客の知えを借りることに区

りをつけて、交信を再開すべく、

運転席のオに引込んだ。老女

はナオひとりに熱を込めて説明

し始めた。

「この辺は作治さんのキャベツ畑が

す。商売がやつて、配達に来

ると、から、よく知つてますよ、」

この間のどこにも畑があるのか

ナオにはわからなかつた。でも、彼

の話しは充分に信じられると、ナオ

は思ふ。女学校への通学路であ

り、今は配達区域がこの辺一帯

なのだから。

運転手は、車による代替輸送を

竹田の運転管理所と相談

してゐるらしい。交信器を耳に

当てたまま、ナオのオに顔を

向けた。

「ナオは、おれは、おれは、おれは、

おれは、おれは、おれは、おれは、

おれは、おれは、おれは、おれは、

向け、
「波野経由で宮地まで行って
もうえますか？」
代替輸送が既に決まったか
のモノ言いである。この人は
途中経過を他人に伝えるの
が下手なのだろう。一途なモ
言いだ。人の良さそうな表情
を向けられてオオは運転手に
同情すること以外は考えてい
なかつた。「ハイ、いのですよ」
と答えたが、内心では憤恨ど
さえた。車で外輪山を越
えることなど予想していなか
たので、「もうけた」とすら思
つたのだ。どんなにダイヤが
乱れようと、否、乱れば乱
れるほどオオはワクワクするの
だった。

しかし、話しがどう進展した
のか、しないのか、さっぱりわか
らない。運転手は再び線
路におりて土を敷き始め
たからである。

オオも土を敷きを手伝う。
オオが貨向を投げかける
前に運転手が、
「タクシー代は宮地の駅員
さんが払ってくれると思いま
すので、申し出て下さい」
と念を押すように言う。
オオは「はい」とは答えたが、
タクシーのことも、それから、
代金を二度はオオ本人に請
求される可能性があると言
うことも、初めて知らされた。
それにしても、どこまでニョ
ディセルカーを走らす気なの
だろう。オオは不安ではな
かたが、どう言う結末が待つ
ているのか、考えが及ばな
かつた。

また動き出した。三人はフロ
ドガラスの向う風景を目で追
う。この地理に詳しいと言
う老女の情報を運転手が頼
りにしているのは会話のふし
じからうかがえた。

左前オに赤いものが光った。
「踏切りだろうか？」
と、オオが言うと、老女も目を
こらす。が、違った。線路脇に立
つ標識塔に塗られた赤い蛍光
塗料が反射したのだ。
同じニョ配でゆっくり上
っていく。時折、運転手の足元
から、けたたましいブザー音が
鳴り出す。そのたびに運転手
は苛立たしげに、ペダルを三三回
踏み込むのだ。そうすると
ブザーはいつの間にかおとなく
なる。運転手が

「速度メーターにものうない低
速だと、ブザーが鳴るん
ですよ」
と教えてくれた。赤く早急に
近かつた。
しばらく行くと、遠くのおで
赤色灯が点滅するのが見え
た。まぎれもなく踏切りだ。
「古閑の踏切りですよ」
と、老女は張りのある声で

二人の男に説明する。
山の中の踏切りに車の影は
ない。人家も見当らない。
同窓は杉が檜の植木の山
であった。
ディセルカーは踏切りにさか
つた。
「カンカンカン」と警音
が小雪舞う無人の山中で鳴
り続ける。運転手は交信
を再開した。

「いま、古閑の踏切りまで来
ました」
「了解。雪の様子はどう
ですか？」
「少し小降りになってます。雪
が両側から倒れ込んでい
るがあります」
「落葉の類がレールの上に
乗ると、それもスリップの
原因になるのだと、運転手
は交信の合間に教えてくれ
た。少づつ口数が増えてい
く。
「わかりました。……運
手さん、お名前は？」
「熊本運転所のウエカタシ

です」
「了解しました。竹田まで戻
らせていただきますから。」
すでに逆戻りの段取りが
ついている。後方にもある運
転席に務るとき、客席に向
う「迷惑をおかけします。こ
から救に戻ります」
と、バカブねに断れる。
二時間かけて上った道を十
分戻ってしまった。オオは
戻深々と頭を下げた。オオ
には異和があった。すべては
雪のせいであり、彼ではない。
でも、そこをなげれば、
ならない理由があるのだら
う。
ミニに来る途中、大分の
駅前に着いたが、駅舎に横
断布が張られていて、それ
には「祝南通ソニック号、
大分博多間三時間六分」と
書きかかれてあった。これ
までの最速特急にちりん号
より十四分速い。() ↓ 一面下
坂へ

「熊本運転所のウエカタシ
です」
「了解しました。竹田まで戻
らせていただきますから。」
すでに逆戻りの段取りが
ついている。後方にもある運
転席に務るとき、客席に向
う「迷惑をおかけします。こ
から救に戻ります」
と、バカブねに断れる。
二時間かけて上った道を十
分戻ってしまった。オオは
戻深々と頭を下げた。オオ
には異和があった。すべては
雪のせいであり、彼ではない。
でも、そこをなげれば、
ならない理由があるのだら
う。
ミニに来る途中、大分の
駅前に着いたが、駅舎に横
断布が張られていて、それ
には「祝南通ソニック号、
大分博多間三時間六分」と
書きかかれてあった。これ
までの最速特急にちりん号
より十四分速い。() ↓ 一面下
坂へ